



Title	2023年度北海道礼文町浜中2遺跡発掘概要報告書
Author(s)	加藤, 博文
Issue Date	2024-04-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92152
Type	report
File Information	2023Hamanaka.pdf



[Instructions for use](#)

2023年度 北海道礼文町 浜中2遺跡 発掘概要報告書



Designed by YUKI koji

北海道大学アイヌ・先住民研究センター
Center for Ainu and Indigenous Studies,
Hokkaido University

例 言

1. 本概報は、2023年8月1日から8月19日にかけて文部科学省 科学研究費助成事業 学術変革領域研究 (A)「日本列島域における先史人類史の統合生物考古学的研究」計画研究 B-02 班「北海道における先史人類及び文化の形成」(領域番号 23H04841)並びに日本学術振興会 研究拠点形成事業(先端拠点形成型)「文化的多様性の形成過程の解明を目指す国際先住民研究拠点の構築」の一環として行った北海道礼文郡礼文町の浜中2遺跡における考古学発掘調査の概要報告である。

2. 本発掘調査は、北海道大学が組織主体となり、以下の体制で実施した。調査組織は以下のとおりである。

発掘主体者 加藤博文(北海道大学アイヌ・先住民研究センター・センター長)

発掘担当者 加藤博文(北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授)

調査員 平澤 悠(東亜大学人間科学部・准教授)

調査員 久保大輔(北海道大学大学院 医学研究院・准教授)

調査員 呉 牧醇(国立台湾大学人類学系・副教授)

調査補助員 ゴメス・アマンダ(北海道大学先住民・文化的多様性グローバルステーション 学術研究員)

調査補助員 アスティエ・クララ(北海道大学アイヌ・先住民研究センター・学術研究員)

調査補助員 劉ビンウン(北海道大学大学院文学院博士課程大学院生)

調査補助員 バラード・ジョーダン(北海道大学大学院文学院博士課程大学院生)

調査補助員 ウラノフ・アレキサンダー(北海道大学大学院文学院博士課程大学院生)

遺 跡 名 浜中2遺跡(北海道教育委員会登録番号:H-08-019)

所 在 地 北海道礼文郡礼文町大字船泊村字ホロナイホ 499-2, 499-4, 499-5

発掘面積 40 m²

3. 2023年度の調査実施にあたっては、日本学術振興会 学術変革領域研究「日本列島域における先史人類史の統合生物考古学的研究」計画研究 B-02 班「北海道における先史人類及び文化の形成」(領域番号 23H04841)並びに日本学術振興会 研究拠点形成事業(先端拠点形成型)「文化的多様性の形成過程の解明を目指す国際先住民研究拠点の構築」の研究経費を利用した。

4. 本概報は、本研究プロジェクトに参加したメンバーが分担しておこなった。出土遺物のうち、遺構図版のトレースは、成廣由紀子(北海道大学アイヌ・先住民研究センター技術補助員)が、出土土器・石器類の実測およびトレースは加藤とアスティエが担当した。

なお本年度の出土遺物のうち、動物遺存体は慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室において佐藤孝雄教授を中心に整理作業をおこなっている。出土した人骨については、北海道大学大学院 医学研究院の久保大輔准教授を中心に整理作業を行っている。また出土人骨のDNA解析については、琉球大学大学院医学研究科の佐藤丈寛准教授を中心に解析中である。

5. 2023年度の出土資料は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターで保管している。

6. 調査に際しては、北海道アイヌ協会事務局より多大なご助力をたまわった。また調査地点地主である末吉愛衣氏には、調査期間の全体を通じてご理解とご協力を得た。調査までの準備と調査実施においては、小野徹町長、竹中俊一教育長、藤澤隆史教育委員会次長、高橋鵬成学芸員をはじめ礼文町および礼文町教育委員会の支援と協力を得た。調査メンバーを代表して感謝の意を表する次第である。

目 次

第1章 調査の目的と実施体制	1
第1節 調査の目的	
第2節 礼文島における調査と研究拠点形成事業との関連	
第2章 浜中2遺跡の調査と概要	2
第1節 調査にいたる経緯	
第2節 礼文島の環境	
第3節 遺跡の立地	
第3章 調査区について	5
第1節 調査区の設定	
第2節 調査区の層序	
第4章 検出された遺構	8
第1節 アイヌ文化期の遺構と出土遺物	
第2節 オホーツク文化期の遺構と出土遺物	
第5章 主な出土遺物	11
第1節 出土遺物の構成	
第2節 土器	
第3節 石器・骨角器	
第4節 NAT005 に伴う副葬品	
第6章 出土人骨に関する骨学的所見	17
まとめ	18

第1章 調査の目的と実施体制

第1節 調査の目的

浜中2遺跡での考古学調査は、2011年からBHAP(Baikal-Hokkaido Archaeology Project)の一環として、アルバータ大学(カナダ)と北海道大学が共同で実施してきた。アルバータ大学との共同調査は、2016年度をもってカナダ側の研究助成期間が終ったため終了している。2017年度以降の調査は、北海道大学の国際フィールドスクールとして、日本学術振興会の科学研究費補助金と研究拠点形成事業の支援を受けて実施してきた。

本遺跡は、これまでの調査によって縄文文化期終末から18世紀のアイヌ文化に至る生活痕跡が4m以上にわたり累積した多層遺跡であることが明らかになっている。2023年度の調査は、2016年度に調査区の南西端のI層中で確認されたアイヌ文化期のアワビ貝の集積遺構と、IX層において確認された縄文文化期後期から晩期にかけての土器・石器・動物骨が集積する文化層の面的広がりを確認することを主たる調査目的として計画された。

第2節 礼文島における調査と研究拠点形成事業との関連

礼文島は、先史時代の狩猟採集民社会の文化変化と環境適応行動の復元にとって最良のデータが得られるフィールドである。本プロジェクトでは、礼文島北部の遺跡の立地環境に注目し、船舶湾域の遺跡群において、1) 居住地点における生業活動の時期的変遷の把握、2) 砂丘形成過程と生業活動面の形成過程の相関関係の解明、3) 古人骨資料からの集団系統や古食性データに関するサンプルの収集、4) 遺跡周辺における古気候環境データの集積を目指している。

2012年度からは、科学研究費補助金基盤研究A「アイヌ民族文化の形成過程の解明に向けた総合的研究」(研究代表者:加藤博文、2012-2015年度)の、2013年度からは日本学術振興会研究拠点形成事業(先端拠点形成型)「北方圏における人類生態史総合研究拠点」の研究助成を受けている。また2016年度からは科学研究費補助金基盤研究A「境界域での民族集団の形成:考古学と人類遺伝学によるアイヌ民族形成過程の解明」(研究代表者:加藤博文、2016-2019年度)に採択され、引き続き助成を受けている。

また2023年度からは、文部科学省 科学研究費助成事業 学術変革領域研究「日本列島域における先史人類史の統合生物考古学的研究」の計画研究B-02班「北海道における先史人類及び文化の形成」(2023年度-2027年度)の一環として調査を実施している。

第2章 浜中2遺跡の調査と概要

第1節 調査にいたる経緯

北海道大学とアルバータ大学による浜中2遺跡における国際共同調査は、2011年度から開始された。調査にいたる経緯は、これまでの概要報告において提示した通りである（加藤・岩波・平澤・鈴木 2012）。2012年度の調査は、主に地中探査レーダーによる表層からの貝層や墓、配石遺構の分布状態を確認する調査を実施した。2013年度の調査は、7月23日から8月20日までの期間で発掘調査を実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2014）。2014年度の調査は、8月1日から8月31日までの期間で実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2015）。2015年度の調査では、それまでのオホーツク文化期と続縄文文化期に加えて、下層にさらに連続することが確認された縄文文化期の遺物包含層を目的として、8月1日から8月31日までの期間に調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2016）。2016年度から2019年度にかけての調査は、調査区の南側においてオホーツク文化期の包含層の調査を、調査区の北側では続縄文文化期および縄文文化期の遺物包含層の調査を目的に実施してきた。

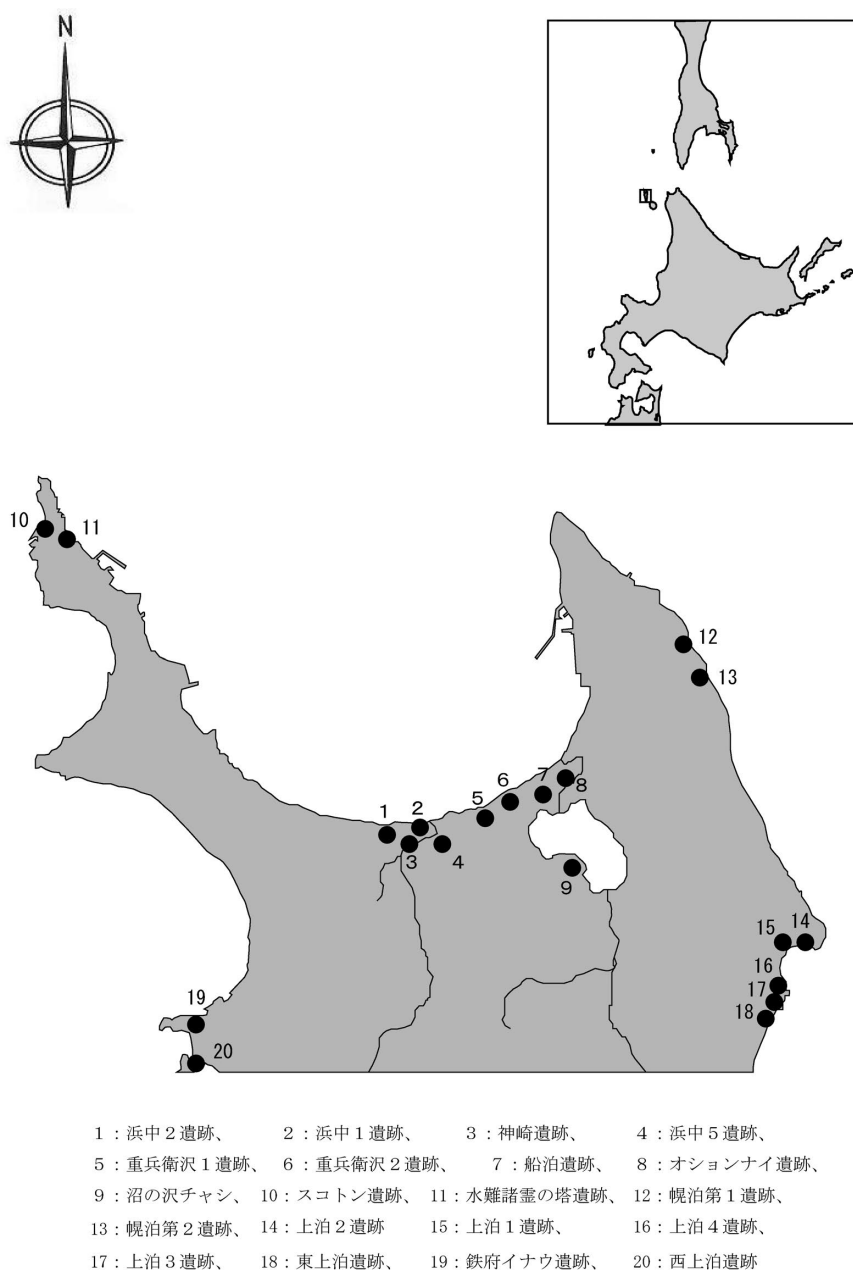
2020年度から2022年度にかけては、新型コロナウイルスの蔓延の影響を受けて、野外調査の実施を見送っている。2023年度の調査は、引き続き、遺跡の最下層の文化層の確認と、調査区南側への上層の文化層の広がりを確認することを目的として計画された。またこれまでの調査内容については、幾度か口頭による報告も行なっている（岩波・長沼 2015、加藤 2015、岩波ほか 2016 など）。

第2節 礼文島の環境

礼文島は、北海道島の北西約60kmに位置する離島である。島は南北に約25.8km、東西に7.9kmと南北に細長く延びる。島の東西の両海岸は、海蝕崖によって急峻な海岸線が続き、島中央部より注ぎ出る河川により開析された谷状地形と河口が入り江状の地形を作り出している。島の北部は、一転して緩やかな起伏が続き、金田岬とスコトン岬に挟まれた船泊湾は、遠浅の大きな内湾地形を作り出しており、湾の中央部には複数の時期により形成された砂丘状地形が広がっている。

島の最高地点は、礼文岳で490mであり、低標高の緩やかな起伏をもった島である。島の動植物は、離島特有の特色を示しており、ヒグマ、エゾシカ、キツネなどの大型中型獣は生息していない。植生としては、針葉樹としてトドマツ、ハイマツ、落葉広葉樹はダケカンバ、オノエヤナ

ギ、草本類ではチシマザサが主体をなす。島の北端に広がる船泊湾は、海岸沿いに広がる砂丘列と東部に位置する久種湖で構成される。湾の東部に位置する久種湖は、周囲 6km ほどの淡水湖である。湖の前面には、船泊砂丘が東西ほぼ 1km にわたり続いている。一方、船泊湾中央部には、島中央部より島最大の河川である大沢川が南から北へ向かい注いでいる。この大沢川の河口から湾の西側スコトン岬方向に向かい形成されているのが浜中砂丘である。これら二つの砂丘である船泊砂丘と浜中砂丘は、異なる時期に形成された複数の砂列帯によって構成されている。



第 1 図 礼文島の位置と島北部の遺跡

第3節 遺跡の立地

船泊湾沿いに広がる砂丘からは、古くから石器や土器、そして人骨が出土することが知られてきた。これまでの調査でもこの一帯に縄文文化期からアイヌ文化期にわたる複数の遺物包含層が存在することが知られている。

船泊湾の東側に伸びる船泊砂丘では、縄文文化期後期から続縄文文化期、オホーツク文化期、さらにアイヌ文化期にわたる遺物包含層が確認されている。この船泊砂丘の西端では、重兵衛沢川が船泊湾に注いでいるが、砂丘先端には擦文文化期から近世アイヌ文化期にかけての遺物包含層をもつ重兵衛沢遺跡、重兵衛沢2遺跡が知られている。船泊湾の中央部には大沢川の河口が位置し、島中央部から北に向かい湾へと注いでいる。河口の西側の砂丘上には、浜中1遺跡と浜中2遺跡が位置する。浜中1遺跡は北海道道507号線の北側に位置し、海側に貝層や墓が集中することが知られ、また数多くの人骨資料が長年にわたり収集されてきた。遺跡の時期はオホーツク文化期から近世アイヌ文化期と推定されている。一方、浜中砂丘の南、後背丘陵の裾野には、神崎ウエンナイ遺跡が位置する。現在の神崎小学校のグラウンドや旧教員宿舎周辺から、続縄文文化期の遺物を含む数多くの土器や石器、動物骨が出土している。

浜中2遺跡の範囲は、現在の浜中集落にほぼ重なる。現在、道道がこの浜中砂丘を東西に貫いて走っており、集落中央の最も高い地点は標高約10mを測る。砂丘の東西端は緩やかな傾斜を示し、砂丘自体の比高差は5m程度を測る。遺跡の包含層は、いくつもの文化層と砂層とが互層となり累積し、多層遺跡となっている。

1990年の浜中集落の排水管の付替え工事に際して実施された事前調査では、続縄文文化期からアイヌ文化期にかけての文化層が確認されている。1990年代には、筑波大学や国立歴史民俗博物館による学術調査が実施され、厚い貝層や住居、墓など長年にわたる複合的な生活痕跡が累積することが明らかにされた。また2011~2015年度には千葉大学文学部考古学研究室が、浜中砂丘の最高地点周囲において（旧中島商店敷地等）で学術調査を実施している。

第3章 調査区について

第1節 調査区の設定

調査区の設定は 2016 年度までの調査を踏襲し、中谷榮氏の所有地南西隅の基準杭から設定した 4m 四方の グリッド配置に基づいている。グリッド番号は南北方向をアラビア数字、東西方向はアルファベットで表記し、これらの北西交差点をもって呼称している（第2図参照）。

2023 年度の調査は大グリッド A01、A02、A03、B01、Z01、Z02、Z03 を対象に実施し、最終的な面積は計 40m² となった。A02-a 及び A02-b、A03-d では IX 層に達している。

A02-c 及び A02-d では VII 層の調査を部分的に行っている。

A01・B01 調査区の北側 では、2019 年度までに確認されていたアワビ貝集積の掘り下げを行っている。アワビ貝の集積はさらに調査区の南側へ伸びており、また調査区の壁面からの観察では、異なる時期の投棄が繰り返されていることが明らかとなっている。現時点でこのアワビ貝の集積遺構の広がりには把握できていない。

第2節 調査区の層序

本遺跡の堆積層は、自然砂層と人為的な魚骨層や獣骨層、生活面で構成される。これらは互層となり全体で 厚い文化層を形成する。ラミナ状に堆積する魚骨層は発掘範囲の全域に連続して均一に広がるものではなく、部分的に重なりながらも、局所的な広がりを見せて堆積している。調査区全体の基本土層は、上層から

I 層：表土層および攪乱層。下層は一部、近世末期の文化層を含む

II 層：砂層。近世アイヌ文化期の局所的なアワビ貝層、擦文文化期、元地式期の遺物を含む

III 層：魚骨層および貝層。オホーツク文化期（元地式期、沈線文式期、刻文式期）の遺物を含む

IV 層：砂層。オホーツク文化期（十和田式期）の包含

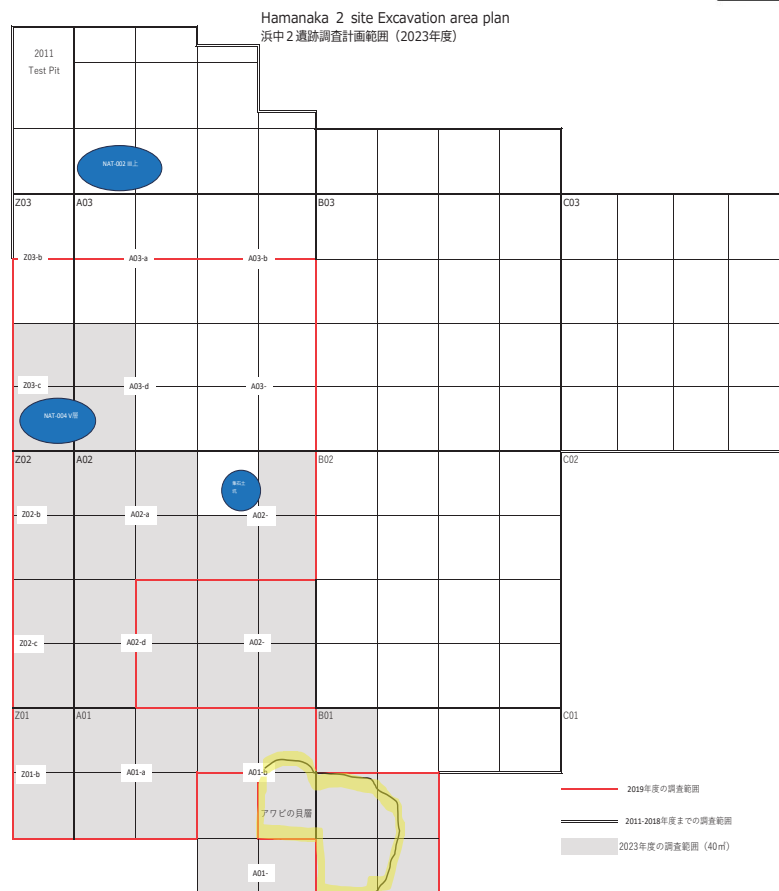
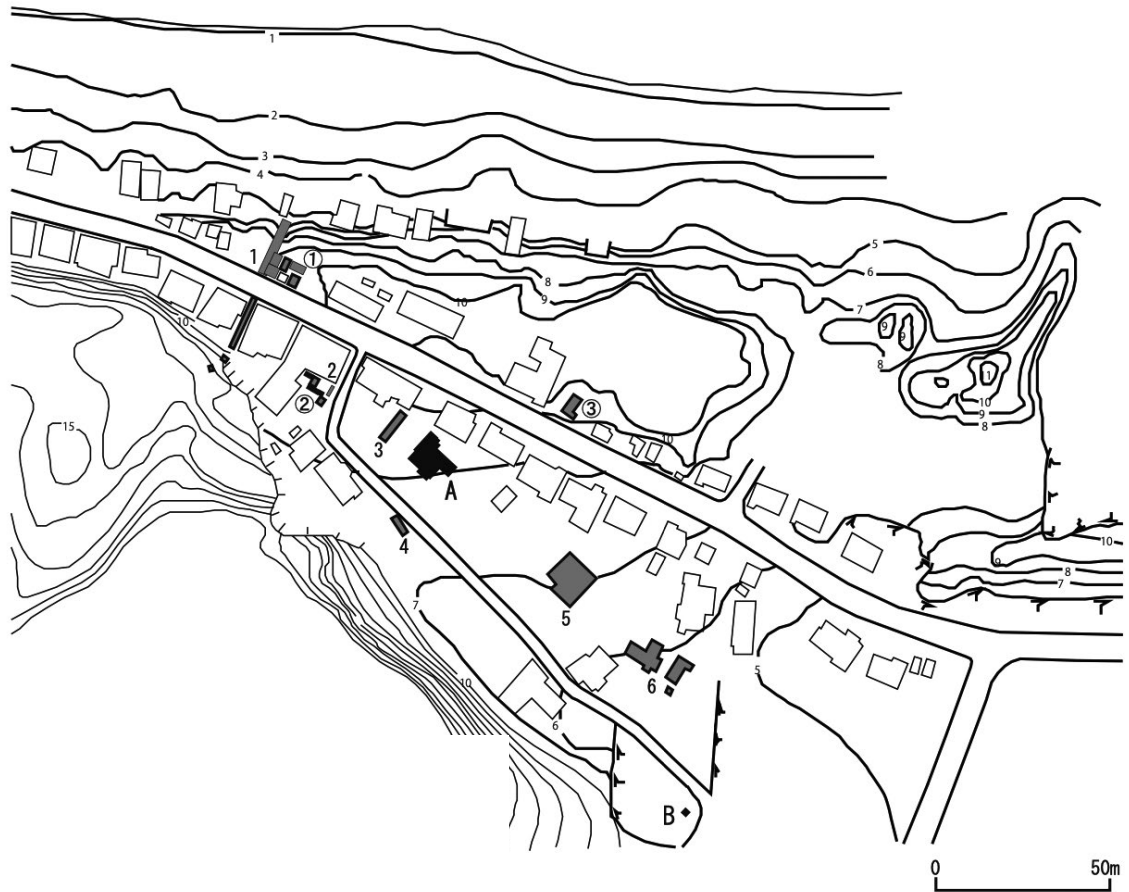
V 層：砂層。オホーツク文化期（十和田式期）～続縄文文化期の文化層

VI 層：砂層。続縄文文化期の文化層

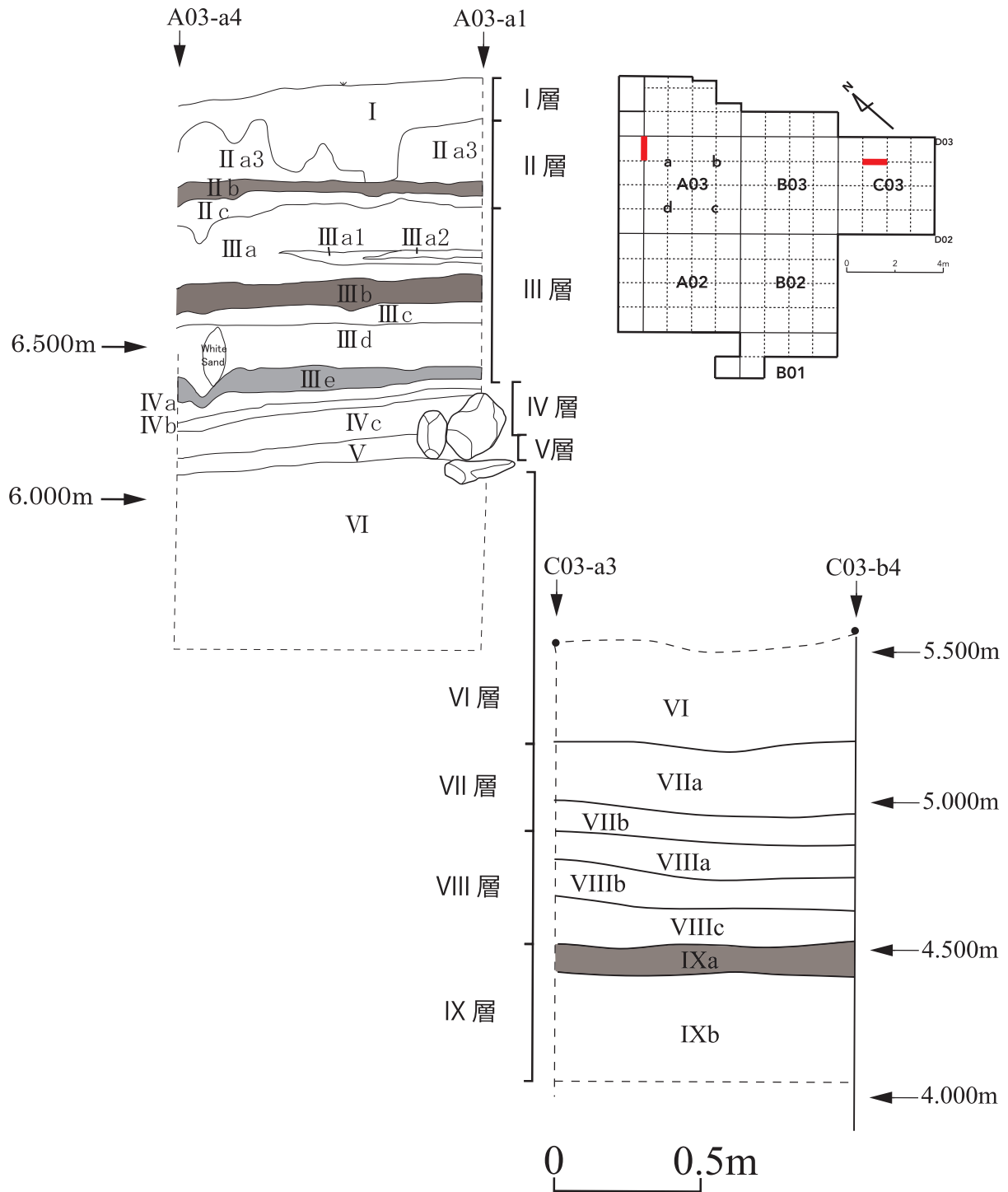
VII 層：砂層。続縄文文化期の文化層で VI 層よりも遺物や遺構が増える

VIII 層：砂層。続縄文文化期および縄文文化後～晩期の文化層で獣骨の密集面を含む

IX 層：砂層。縄文文化後期の文化層で獣骨の密集面を含む



第2図 遺跡の周辺地形と調査区配置図



第3図 遺跡の基本層序

V層：砂層。オホーツク文化期（十和田式期）～続縄文文化期の文化層

VI層：砂層。続縄文文化期の文化層

VII層：砂層。続縄文文化期の文化層。VI層よりも遺物を多く含む。

VIII層：砂層。続縄文文化期及び縄文文化晩期の文化層。獣骨の集中を含む。

IX層：砂層。縄文文化晩期の文化層。獣骨の集中を含む。

第4章 検出された遺構

第1節 アイヌ文化期の遺構と出土遺物

アワビ貝集積遺構（第3図・第4図・第5図）

2016年度に確認したアイヌ文化期のアワビ貝の集積は、2018年度と2019年度にかけても調査を継続した。2023年度は、B01-a区とB01-d区を中心にアワビ貝層の広がりを調査するとともに、貝層の掘り下げを行った。

アワビ貝の貝層の層厚は、全体として10cm程度をはかり、方形や隅丸方形のヤスによる刺突痕が認められる貝を含んでいる。アワビ貝の貝層の下からは海獣骨やオットセイの肩甲骨が出土している。また鯨骨を素材とした期部に段状の抉入部を持ち、先端を尖らせた骨角器が同様にアワビ貝層の直下より出土している（第6図）。同様の骨角器は、1990年に調査された本遺跡のB地点（前田・山浦編1992）や同じく船泊湾に位置する重兵衛沢2遺跡（松谷編1986）の近世アイヌ文化期のアワビ貝層から出土している。重兵衛沢2遺跡の調査報告書においては、「基部抉入骨器」と仮称されている（松谷編1986:18）。

これまでのアワビ貝層からは、マキリや古銭などの金属製品がカットマークを残す海獣骨と共に出土している。本調査区におけるアワビ貝層については、出土状況や人為的に形状を改変させた金属製品などの共伴から、「アワビ送り」などの儀礼行為の痕跡である可能性を指摘してきた（平澤・加藤2019、加藤編2020）。今回出土した鯨骨製の骨角器の出土状況を考慮すると、この骨角器自体も「アワビ送り」や海獣骨と関わる儀礼行為に係る資料であると考えられる。またアワビ貝層の下位には、直径1mの範囲に円形に小型の礫を集中させた遺構が確認されている（第5図）。

現状では、小礫の集中と骨角器や海獣骨の配置、アワビ貝層の形成は、一連の連続した行為の結果、形成された遺構であると考えている。

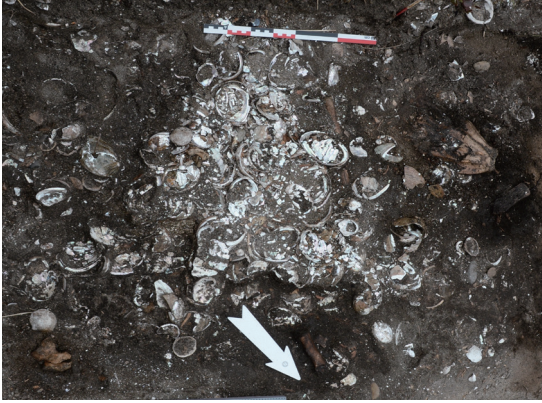
第2節 オホーツク文化期の遺構と出土遺物

1) 元地式土器（第7図）

A01-B2及びA01-b3区を掘り下げている過程で、II層中より元地式土器がほぼ完形の状態で出土した（第7図）。周辺に明確な遺構は確認できていないが、二個体分の元地式土器が倒置された状態で出土しており、何らの遺構が下位に位置している可能性がある。

2) 十和田式段階の墓（第8図・第9図）

十和田式段階の墓については、2017年度調査において成人女性の墓が検出されたが（加藤・平澤2018）、2023年度の調査においても十和田式段階の墓が新たに検出された。十和田式段階の埋葬事例については、1993年に実施された筑波大学による調査（I-3号墓）による成人女性（Ishida et al. 1994、前田・山浦編2002）、及び2017年度に確認された成人女性（NAT004号人骨）に



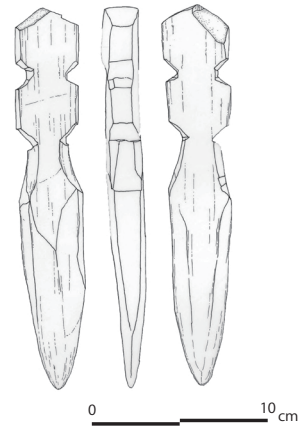
第3図 アワビ貝層確認状況



第4図 鯨骨製骨角器出土状況



第5図 アワビ貝層下小礫集中



第6図 扶入骨器

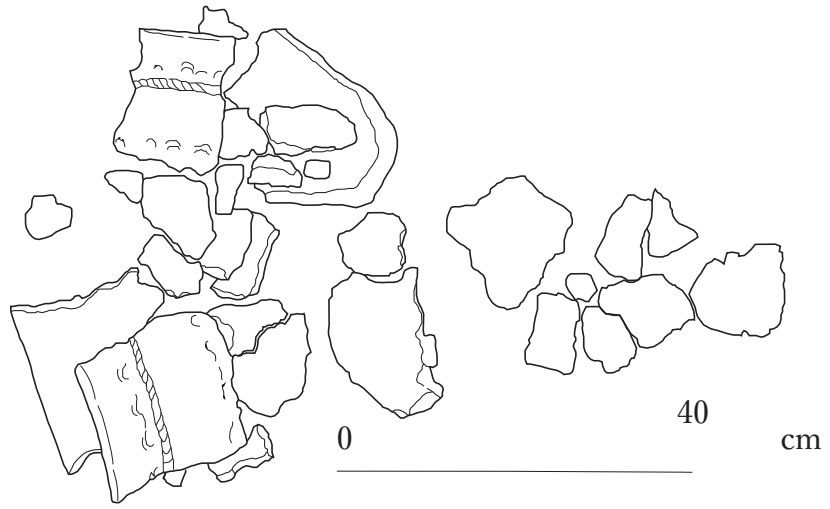
次いで（加藤・平澤 2018）3 例目となる。

埋葬された人骨（NAT005 号人骨）の遺存状態は良好であり、ほぼ完全な状態で副葬品を伴っている（第8図）。この墓は、調査区北端の A03-B1 区の北壁を清掃する過程で確認された。墓は、十和田式段階の文化層である V 層をわずかに掘り込み構築されており、遺体は屈葬の状態で見られる。被葬者は成人男性であり、墓には、玉髓製両面加工尖頭器 1 点、磨製石斧 2 点、砥石 1 点、骨針 1 点が副葬品として伴っている（第9図）。現在、年代測定や DNA 解析、安定同位体分析を進めている。

3) 続縄文段階の墓（第10図）

続縄文文化段階の遺物が出土する第VII層においても墓が確認されている。墓は、調査区北西壁近くで確認されたため、上半身部分は、調査できていない。副葬品と考えられる資料も現段階では確認されていない。この埋葬事例については、2024 年度の調査で改めて確認を行う予定である。

B02-b3

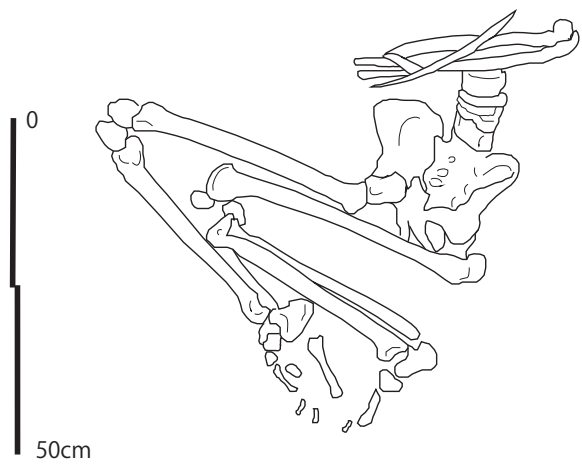


B02-b2

第7図 元地式土器出土状況



第8図 NAT005 埋葬検出状況図



A02-b1

第9図 NAT006 埋葬検出状況図

第5章 主な出土遺物

第1節 出土遺物の構成

本年度の発掘調査においては、表土であるI層から縄文文化後期と推定されるIX層まで、各層から多様な遺物が出土した。層ごとの出土総数や詳細な内訳は現在確認中だが、現場でトータルステーションを用いて3Dデータを記録して取り上げた主な資料は土器片139点、石器76点、骨角器類17点、動物遺存体88点、金属製品3点であった。その他の人工・自然遺物を含めると、記録点数は計336点であった。なお骨角器類とは典型的な製品やその破損品だけでなく、加工痕跡やカットマークのある資料を含めた点数である。

第2節 土器（第10図・第11図）

第10図1は、十和田式土器。口縁部から胴部上半を残す。頸部に隆帯の貼付けを横走させている。隆帯直下には縦方向の二列の刺突文を二つ組合せて配置している。2は、元地式土器の口縁部破片。3は十和田式土器の口縁部破片。4は摩擦式浮文土器の小型土器。口縁直下に3条の横走する浮文を持つ。肩部にボタン状の装飾文を配置する。5は刻文と沈線を組合せた深鉢土器の口縁部破片。6は沈線文式土器の小型土器。器形の半分を残す。口縁直下に複数の沈線を横走させ、肩部にボタン状の装飾文を施している。7は、沈線文土器の深鉢の口縁部。二本の沈線を横走させ、その間を斜行する沈線で埋めている。

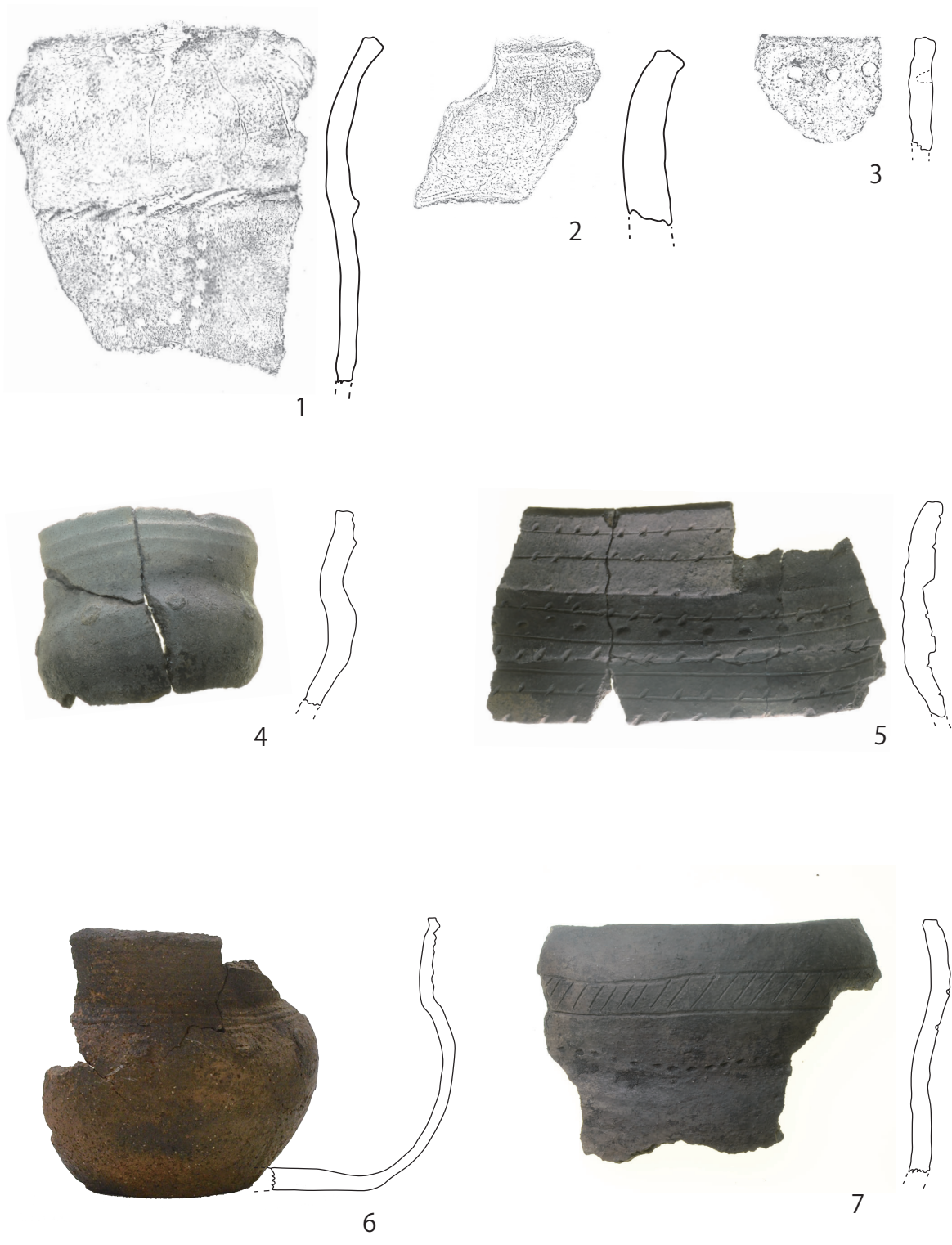
第11図1は、摩擦式浮文土器の口縁部破片である。口縁直下に3条の摩擦式浮文を横走させている。2は無文の口縁部破片。3は、口唇直下に指圧による波状文を横走させたもの。4と6は、2条から3条の沈線を口縁直下に横走させた小型土器の口縁部破片である。7は沈線文土器。口縁部から胴部上半までを残している。5と9は刻文式土器の口縁部破片。8は十和田式土器の口縁部破片。12は沈線文式土器の口縁部破片。10-11、13-15は続縄文土器の口縁部破片。口唇部に縄文を押圧し、口縁直下に刺突文を施している。16-19は縄文文化晩期の口縁部破片。17と18は浅鉢形土器の口縁部破片と思われる。

第12図1は元地式土器。一部を欠損するがほぼ完形を留める。口縁直下と肩部に指圧による波形文を横走させている。頸部には刻みを入れた隆帯を施している。

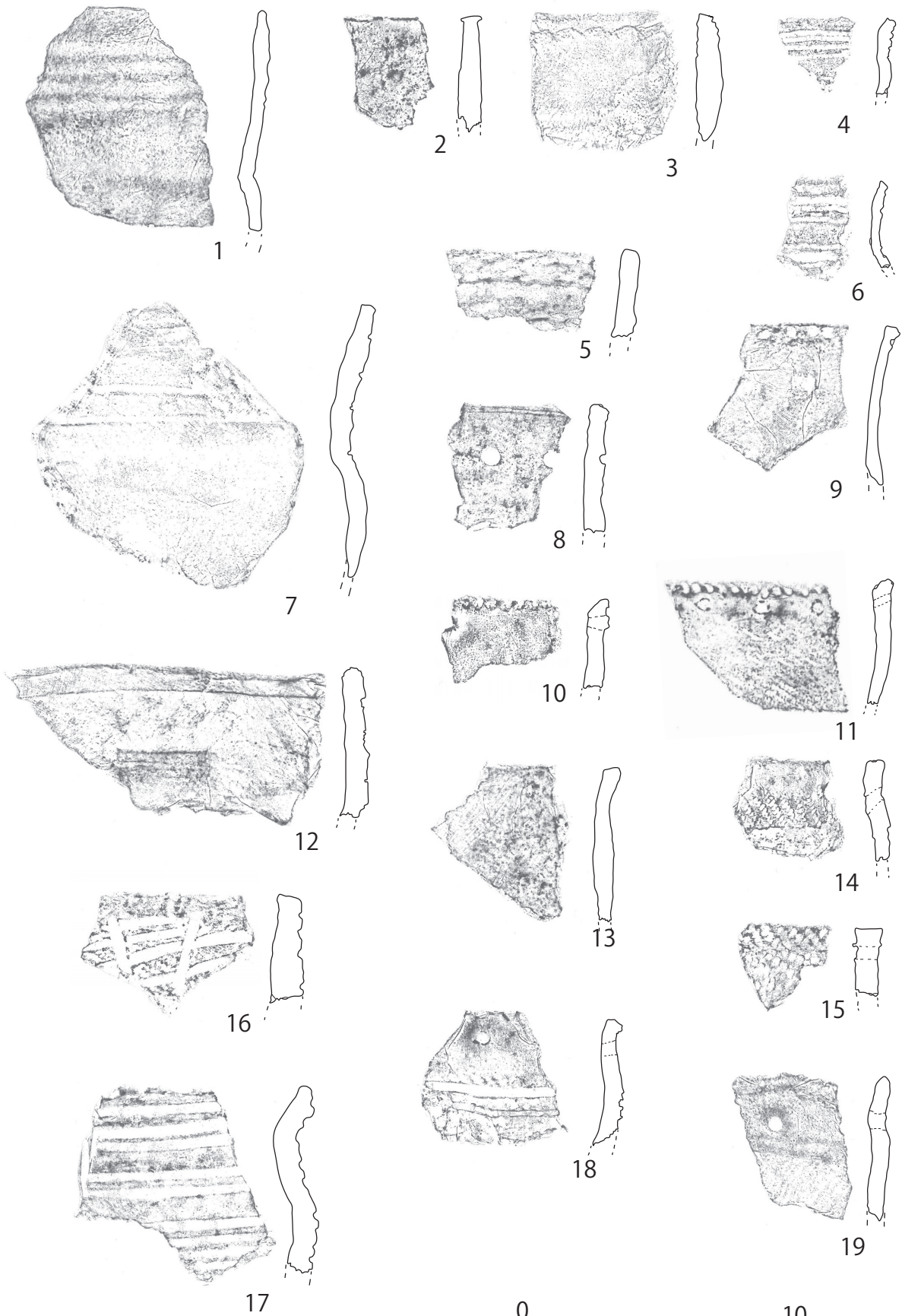
第3節 石器・骨角器（第13図）

1は、オホーツク文化期のⅢ層より出土した頁岩製の両面加工の石槍。腹面に素材の剥離面を部分的に残す。側面には礫面も一部残っている（最大長：75mm、最大幅：32mm、最大厚：1.1mm）。3は十和田式段階のⅤ層より出土した頁岩製の搔器。厚手の剥片の一端に急角度の刃部を作出している。腹面側にも剥離による調整痕を残す（最大長：60mm、最大幅：56mm、最大厚：22mm、刃部角度は65°）。4は縄文晩期のⅧ層から出土した頁岩製の搔器。厚手の剥片の一旦に急角度の刃部を作出している（最大長：60mm、最大幅78mm、最大厚：25mm、刃部角度は93°）。5は、オホーツク文化期のⅢ層から出土した安山岩製の敲石（最大長：110mm、最大幅：56mm、最大厚：40mm）。

7は、続縄文文化期のⅦ層から出土した骨角製刺突具。基部には面取りを行った痕跡を残



第10图 出土土器



第 11 图 出土土器



第12図 元地式土器

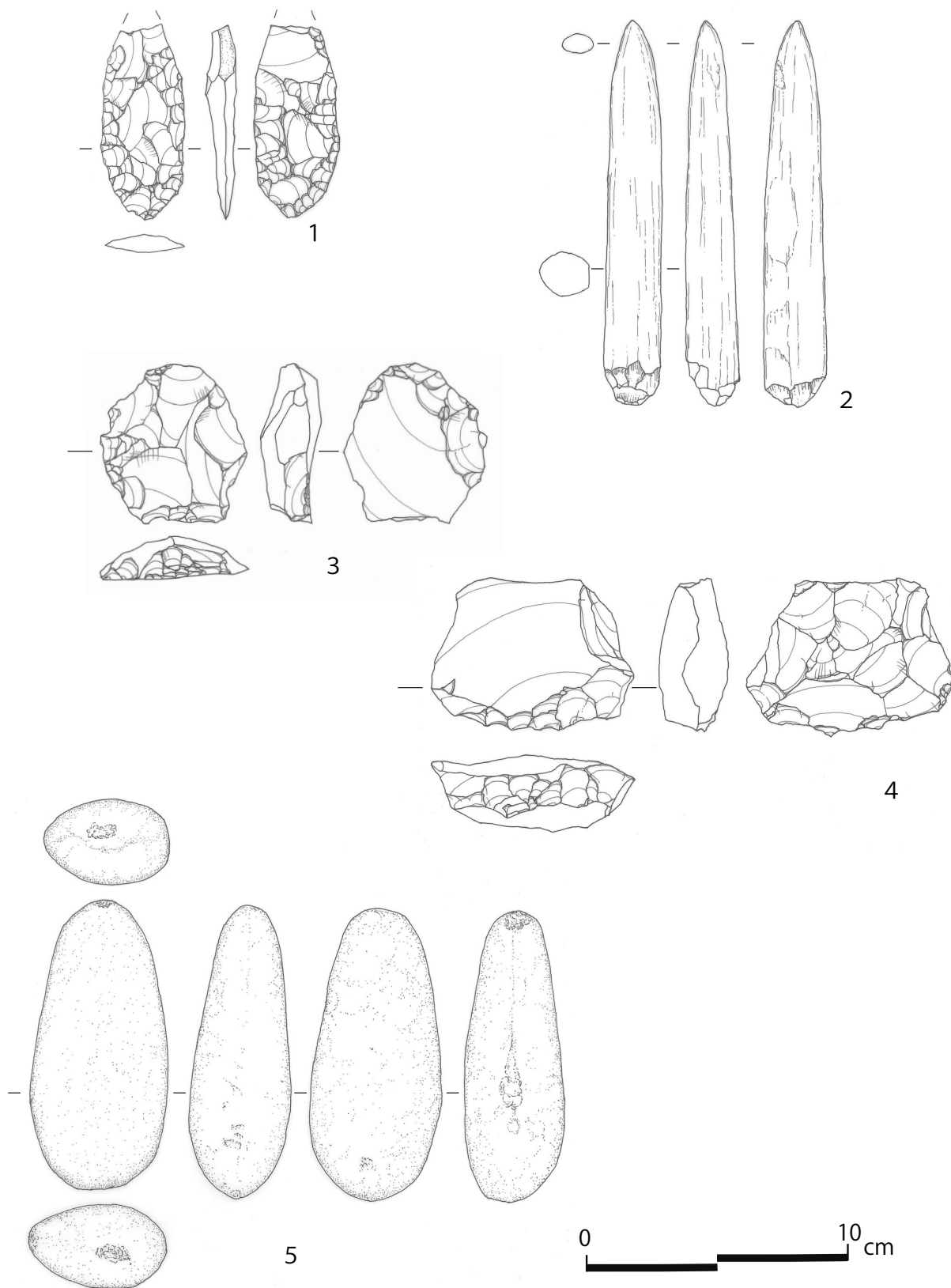
している。胴部から先端部にかけては研磨されており、尖頭部特に入念に作り出されている（最大長：145mm、最大幅：20mm、最大厚 20mm）。

第4節 NAT005 に伴う副葬品

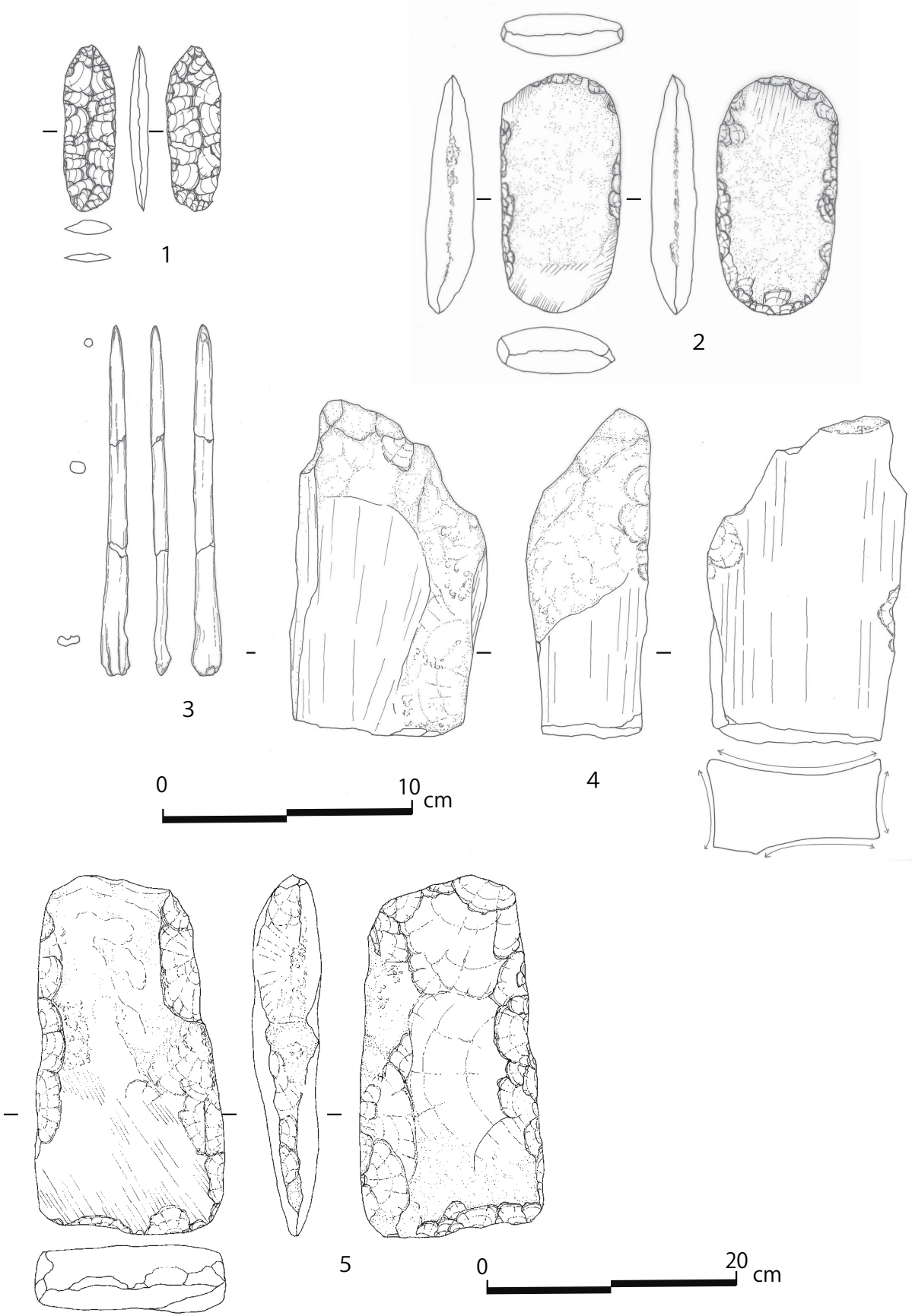
十和田文化期の資料が出土するV層において墓が確認された（第8図参照）。出土した人骨はNAT005号と仮称されたが、この墓には複数の副葬品が確認されている。それぞれ第14図に図示してある。

1は、白色チャート製の小型尖頭器。両面は入念に押圧剥離により調整されている（最大長：66mm、最大幅：20mm、最大厚 8mm）。2は緑色岩製の磨製石斧。両端に敲打と研磨によって刃部を作出している（最大長：93mm、最大幅：48mm、最大厚：18mm）。3は、骨角製尖頭器。全体的に研磨されている。（最大長：138mm、最大幅：13mm、最大厚：7mm）。4は、泥岩製の砥石。四面全てに研磨の痕跡が確認できる（最大

長：130mm、最大幅：78mm、最大厚：50mm）。5は、粘板岩製の磨製石斧。扁平の礫を素材とし、周辺を敲打で加工し、端部を研磨して刃部を作出している（最大長：144mm、最大幅：75mm、最大厚：29mm）。



第13図 出土石器・骨角器



第14図 NAT005 に伴う副葬品

第6章 出土人骨に関する骨学的所見

北海道大学大学院医学研究院・准教授 久保 大輔

頭蓋に関してはゲノム分析に備えて採集後速やかにフリーザーに保管したため、まだ観察を行っていない。以下では頭蓋以外の部位の観察結果について述べる。

腰椎の椎体部、胸骨、肋骨体の前半部などいくつかの部位の保存状態は不良であるものの、その他の部位は概ね良好に保存されている。寛骨の形態から明らかに男性である。年齢指標の観察結果は以下のとおりである。鎖骨の胸骨端が完成しているため、20代後半以上と推定される。左右の恥骨結合面はSuchey-Brooks法 (Brooks and Suchey, 1990) のフェーズIVに相当し、壮年(30代)の可能性が高いが50代後半もありうる。左右の腸骨耳状面はOsborne et al. (2004) の6段階法のフェーズ5に相当し、熟年(50代)の可能性が高いが20代前半から老年の可能性もありうる。第1肋骨は左側が保存良好で、DiGangi et al. (2009) の方法で評価すると、肋骨前端面の形状(CF1)と肋骨結節面のテクスチャー(TF3)は、それぞれスコア2とスコア3に相当し、比較的若い成人(20代から40代前半)の可能性を示唆する。左右の膝蓋骨はSakaue (2008) の累積スコアが0で、20代後半から30代の可能性が高いが、40歳以上の可能性もある。他の四肢骨も変形性関節症が目立たないことから、老年個体とは考えにくい。上顎歯は前述の理由で未観察だが、下顎歯の咬耗は著しい。切歯・犬歯・小臼歯の咬耗をSmith (1984) の方法で評価するといずれもステージ6±1であった。第一大臼歯の咬合面は頬側に著しく傾斜しており、咬耗ステージは7または8、第二大臼歯と第三大臼歯はそれぞれステージ5とステージ3相当であった。2017年の調査で出土した熟年女性個体(NAT004)に比べて第二大臼歯の咬耗は弱い、切歯と犬歯の咬耗はNAT005のほうが進んでいる。以上に述べた骨の諸特徴と歯の咬耗を総合すると、NAT005は壮年個体(20代後半から40代の可能性はあるが、30代の可能性が高い)と考えられる。

下顎左第一大臼歯の咬合面には歯髓腔が露出している。近心根管と髓室床は本来の形状を保持しているように見えるが、髓室床に接する遠心の陥凹は本来の遠心根管の形状ではなく、錐状の道具で穿ったような形状をしており、人為的な穿孔の可能性が疑われる。左右の腓骨は、腓骨頭が内側下方に伸びる鉤状の突起を有する。突起の先端と腓骨頭関節面との間には逆三角形の粗面が形成されている。鉤状の突起は腓骨体の内側稜の延長線上にあり、後面から見ると脛骨のヒラメ筋線に沿うように伸びていることから、この突起はヒラメ筋からの張力を受けて発達した骨棘ではないかと考えられる。

Brooks S. and Suchey J.M. (1990) Skeletal age determination based on the os pubis: a comparison of the Acsádi-Nemeskéri and Suchey-Brooks methods. *Human Evolution*, 5: 227–238.

DiGangi E.A., Bethard J.D., Kimmerle E.H., and Konigsberg L.W. (2009) A new method for estimating age-at-death from the first rib. *American Journal of Physical Anthropology*, 138: 164–176.

Osborne D.L., Simmons T.L., and Nawrocki S.P. (2004) Reconstructing the auricular surface as an indicator of age at death. *Journal of Forensic Sciences*, 49: 905–911

Sakaue K. (2008) New method for diagnosis of the sex and age-at-death of an adult human skeleton from the patella. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series D*, 34: 43–51.

Smith B.H. (1984) Patterns of molar wear in hunter-gatherers and agriculturalists. *American Journal of Physical Anthropology*, 63: 39–56.

まとめ

2023年度の調査では、近世アイヌ文化期のアワビ貝層、オホーツク文化期と続縄文文化期の包含層の広がりを確認することができた。

近世アイヌ文化期のアワビ貝層については、これまでの概報においても提示してきた通り、アワビ貝を集積した内部から人為的に変形された金属器が出土しており、何らかの儀礼行為との関係を推定してきた。今年度の調査では、アワビ貝層の下位から骨角器が出土し、また貝層の直下に小石を円形に敷き詰めた遺構が伴うことも確認することができた。同様の遺構のあり方は、同じ礼文島内の重兵衛沢2遺跡においても確認されている（松谷編 1986）。今回、同様の遺構が確認されたことで、アワビ貝の集積に関する一連の儀礼的行為が少なくとも礼文島においては、行われていたことが確認できるとみなせよう。

オホーツク文化の包含層の掘り下げは、A02区を中心に行ったが、調査区の南側には魚骨層の広がりには確認できなかった。オホーツク文化期の包含層はⅢ層として取り扱ったが、層厚は薄く、分層できる厚さではない。今年度の調査では、摩擦式浮文土器や沈線文土器が主体的に出土しており、オホーツク文化期でも後半期に属する包含層であると思われる。

続縄文文化期の包含層は、A02-aとA02-b区において確認することができた。密に海獣骨や剥片類が広がっており、遺物の広がりには南側へ伸びる傾向を示している。続縄文文化期の広がりについては、2024年度の調査で確認していきたい。

2023年度の調査では、十和田文化期と続縄文文化期の墓が確認された。十和田文化期の埋葬例としては、3例目のものであり、男性の墓は初めての確認である。続縄文文化期の墓は調査区の西壁脇で確認されたために今年度の調査で全体を確認することはできなかった。2024年度の調査で確認を行う予定である。

引用・参考文献

- 岩波連・長沼正樹 2015 「浜中 2 遺跡の遺跡形成過程とその特異性」『一般社団法人日本考古学協会第 81 回総会研究発表要旨』、日本考古学協会、東京、154-155 頁
- 岩波連、平澤悠、岡田真弓、種石悠、長沼正樹、藤澤隆史、蔦谷匠、佐藤丈寛、深瀬均、木村亮介、米田穰、安達登、佐藤孝雄、石田肇、加藤博文 2016 「礼文町浜中 2 遺跡における考古学調査 (2011-2016 年度)」北海道考古学会 (編) 『2016 年度北海道考古学会遺跡調査報告会資料集』、北海道考古学会、登別、83-92 頁
- 加藤博文 2015 「礼文島における海洋適応史の復元-国際共同研究を通じた取り組み-」岸上伸啓 (編) 『国立民族学博物館調査報告 132 環北太平洋地域の先住民文化』、国立民族学博物館、大阪、125-143 頁
- 加藤博文、岩波連、平澤悠、鈴木建治 2012 『2011 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡考古学調査概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、<http://hdl.handle.net/2115/52658>
- 西本豊弘編 2000 『浜中 2 遺跡発掘調査報告書』国立歴史民俗博物館研究報告 85 集
- 東通村史編集委員会編 1999 『東通村史 遺跡発掘調査報告書編』東通村
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2014 『2013 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/56663>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2015 『2014 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/58760>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2016 『2015 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/80127>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2017 『2016 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/65258>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2018 『2017 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/88800>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2019 『2018 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、<http://hdl.handle.net/2115/76489>
- 前田潮・山浦清編 1992 『北海道礼文町 浜中 2 遺跡の発掘調査』北海道礼文町教育委員会
- 前田潮・山浦清編 2002 「礼文島浜中 2 遺跡第 2~4 次発掘調査報告」『筑波大学先史学・考古学研究』13、35-87 頁
- 松谷純一編 1986 『重兵衛沢 2 遺跡』北海道礼文町教育委員会
- 三宅俊彦 2020 「海外で出土した寛永通宝」『月刊 考古学ジャーナル 4』No. 738、9-13 頁
- 柳澤清一編 2016 『北海道礼文町浜中 2 遺跡 第 5 次発掘調査概報』、礼文・利尻島遺跡調査の会
- Müller S., Schmidt M., Kessler A., Leite C., Irino T., Yamamoto M., Yonenobu H., Gosler T., Kato H., Wagner M., Water A., and Tarasov P. 2016, Paleobotanical records from Rebun Island and their potential for improving the chronological control and understanding human-environment interactions in the Hokkaido Region, Japan. The Holocene, 1-15, pp.1646-1660, <https://doi.org/10.1177/0959683616641738>

報告書抄録

ふりがな	にせんににじゅうさんねんどほっかいどうれぶんちょうはまなかにいせきはつつがいようほうこくしよ						
書名	2023 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書						
副書名	Preliminary Archaeological Field report of Excavation at Hamanaka 2 site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 加藤博文研究室						
編集機関	北海道大学アイヌ・先住民研究センター						
所在地	札幌市北区 8 条西 6 丁目						
発行年月日	2024 (令和 6) 年 4 月 10 日作成						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	
		市町村	遺跡番号				
はまなかにい せき 浜中 2 遺跡	ほっかいどうれぶんぐんれ ぶんちょう おおあざふなどま りむら あざほろないほ 北海道 礼文郡 礼文町 大字船 泊村 字ホロナイホ	1517	H-08- 19	45 °43 '26 "	141 °00 '96 "	2019080 1~ 2019082 5	42 m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
浜中 2 遺跡	遺物 包含地	アイヌ文化期 (近世) オホーツク文化期 統縄文文化期	アワビ殻 を特徴と する混土 貝層 動物骨集 中	方形の孔を有するアワ ビ貝殻 土器片 (オホーツク土 器)、石器、骨角器 (骨鏃など) 十和田文化期の墓 1 基 土器片・石器 (両面調 整石器など) 動物遺存体 (海獣類、 鳥類など) 統縄文文化期の墓 1 基	I 層中で検出したア ワビ貝殻を特徴とす る混合貝層は送り場 と考えられる		
要約	B01 調査区の I 層中において近世アイヌ文化期の送り場遺構と考えられるアワビ貝殻の集中区を確認した。A02 区では III 層中にオホーツク文化期の包含層を確認している。オホーツク文化期の包含層は調査区南東側において魚骨層の広がり認められない。十和田文化期と統縄文文化期の墓が確認されている。						

2023 年度

北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書

2024 年 4 月 10 日 作成

編集 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 加藤博文研究

060-0808 北海道札幌市北区北 8 条西 6 丁目

